五仏心王について
―論義書を中心に―

北川　真寛

はじめに

弘法大師空海（七七四―八三五。以下、大師）は自身の著作の中で、即身成仏や十住心思想、実践行としての三密行などを説き、自身が唱えた密教の定義づけを行った。そしてこれが後の東密教説を形成する出発点となったことは周知の通りである。

しかし後の東密では、天台宗の密教導入、さらには鎌倉期を中心とした新思想の興隆などによって、広く諸宗の教義から大師の思想を追い、さらには同時代的な問題に対応させるという作業が不可欠となった。そのため諸宗の教学と真言教学、あるいは真言密教の諸流派や諸山の法門の義理を問答によって分別する「論義」が盛んに行われるようになり、鎌倉～室町時代までには一定の形式が成立して、法会として儀式化された。

また論義には、さまざまな教説や問題点について問答を行い、密教教理の理解をさらに深めようとする、一種の学修システムの側面もある。そのため、敢えて問・答両者に分かれての一種のディベート形式で問答される場合もある。いずれにしてもその成果が論義書という形で残されていて、それらのテキスト群の研究は、東密のみならず日本における仏教思想の展開を研究する上で大変重要である。そのため論義書の検討を行う[1]ことで、大師の唱えた密教の内実をより精緻に、かつ明確に把握し、さらに大師以後の諸師たちがどのように密教を展開させてきたかを知ることができるのである。しかし一々の論題についての詳細な研究は未だ十分になされているとは言えない状況にある。

そこで本論では、これまで研究課題として取り上げられたことのない論題の一つである「五仏心王」の記述について、論義書を中心に検討する。論義には「一乗経劫」や「三密双修」などの多くの論義[2]が残されているが、中でも「五仏心王」は大日を中尊

とした五仏について、五仏が共に心王であるのか、それとも大日のみを心王と認め、他の四仏を心数とするのかを論じる論義であり、現在でも高野山の論義法会において用いられている。五仏心王の論義では、唯識や三論の教説も参考にしつつ問答がなされていて、本論では特に『宗義決択集』（以下、『宗決』）の記述を中心に、他の論義書の記述も合わせて検討することで、学派による特徴や差異なども探っていく。

一　弘法大師空海の著作における心王・心数解釈―五仏心王の出発点―

それではまず論義の出発点となった、大師の心王・心数の教説について確認しておく。周知の通り、『即身成仏義』（以下、『即身義』）では、二頌八句の中で「心数心王、刹塵に過ぎたり」[3]と説かれるように、心王・心数が無数にあることを説いている。これについて『即身義』では次のように説明している。

諸法とは謂わく諸の心法なり。心王・心数、其の数無量なり。故に諸と曰う。心・識、名異にして、義通ぜり。故に天親等は三界唯心を以て唯識の義を成立す。[4]

すなわち、諸法とは諸々の心法であり、心王・心数は其の数が計り知れないから諸と言うのである。心と識は名称が異なっているだけで、意味内容は通じている。そのために唯識学派の天親（世親）等は、「三界唯一心」を説いて唯識説を成立させたのである、と述べている。

これに関連して、大師は「心王とは識大なり」[5]と述べ、さらに次のように定義する。

次の両句は即ち此の義を表す。若し決断の徳を明かすには、則ち智を以て名を得。集起を顕すには、則ち心を以て称と為。軌持を顕すには、則ち法門に称を得。一一の名号、皆人を離れず。是くの如くの人、数刹塵に過ぎたり。故に一切智智と名づく。

顕家の一智を以て一切に対して、此の号を得るには同ぜず。心王とは法界体性智等なり。心数とは多一識なり。各具五智とは、一々の心王心数に各々に之れ有ることを明かす。[6]

ここでは、心数心王過刹塵・各具五智無際智の「両句」の解説として、智と心と法の名称は人を離れるものではなく、其の数は無数であるから一切智智の意味が顕教とは異なることを述べた後に、心王は法界体性智などの智であり、心数とは『釈摩訶衍論』（以下、『釈論』）に説かれる十識のうちの一つである多一識の識である、とする。

さらに大師は『秘密曼荼羅十住心論』（以下、『十住心論』）では、第十秘密荘厳住心を説く中で次のように説く。

一一の字門の五字は、即ち各各の門の五仏・五智なり。是くの如くの五仏、其の数無量なり。五仏は即ち心王、余尊は即ち心数なり。心王・心数、其の数無量なり。[7]

『十住心論』巻第十では、真言とは曼荼羅であることを述べ、梵字を挙げてそれぞれに説明し、それらは因・行・証・入・方便具足の五字・五仏・五智に展開することを説く中で、五仏を心王、余尊を心数と規定している。そしてこの規定こそが、後の「五仏心王」の直接的な根拠となっていることを附言しておく。

これに関連して、直接的に心王・心数に言及した語ではないものの、「王の字は五仏に通ず。五仏は共に五大の王たり」[8]と説く『金剛頂経開題』の記述も挙げておく。

これに対して、大師撰と信じられた『秘蔵記』には、「中台の毘盧遮那を法身と為し、四仏を応身と為し、釈迦を化身と為し、外金剛部の龍鬼等を等流身と為す」[9]、あるいは「中台心王の尊を以て一切の心主を摂す。是れを一識と謂う」[10]、または「心王の毘盧遮那成仏する時、無数の心主同時に成仏す」[11]とあって、必ずしも心王を五仏に限っていない。つまり大師が説く心王・心数に曖昧さと齟齬が生じていると考えられたことが、後の「五仏心王」の論義が展開する一因となったと思われる。

二　「五仏心王」記載の論義書一覧―五仏心王・大日心王（四仏心数）―

大師が説いたとされる心王・心数の規定をめぐって、後世の諸師たちは「五仏心王」の論題をたててさまざまに論じている。次にその管見の一覧を挙げる。

○東密

道範（一一七八？／七九？―一二五二）

「問。心王所住之処文所云心王可云五仏俱有耶」（『大日経疏除暗鈔』第五。以下、『除暗鈔』）[12]

「問。此心王心数分別時以八葉中四仏四菩薩置何位乎」（『大毘盧遮那成仏経疏遍明鈔』巻第三。以下、『遍明鈔』）[13]

頼瑜（一二二六―一三〇四）

「心王所住之処等者。准上文云如来在此宮中為独処耶」（『大日経疏指心鈔』巻第二）[14]

頼宝（一二七九―一三三〇？）

「於曼荼羅分別心王心数事」（『真言本母集』巻第六）[15]

「心王所住文限中台大日歟事」（『真言本母集』巻第一三）[16]

杲宝（一三〇六―一三六二）

「心王心数分別事」（『杲宝伝宝記』巻第四）[17]

「識智二法心王心数分別事」（『杲宝私抄』第一二）[18]

聖憲（一三〇七―一三九二）

「王所分別」（『大疏百条第三重』巻第二）[19]

長覚（一三四〇―一四一六）

「四仏属心数事（心王心数）」（『大疏指南鈔』巻三）[20]

宥快（一三四五―一四一六）など宝門相伝

「五仏心王」（『宗決』巻第三）

印融（一四三五―一五一九）

「心王心数事」（『大疏愚案鈔』下）[21]

「四仏有属心数義歟事」（『杣保隠遁鈔』巻第六）[22]

「心王心数分別有重々義門事」（『古筆拾集抄』巻第三・四）[23]

長淳（―一五〇三―）

「心王心数互為勝劣歟事」（『夏中問答（九牛一毛鈔）』五）[24]

運敞（一六一四―一六九三）

「王所分別」（『大疏談義』巻第四）[25]

○台密

仁空（実導、一三〇七―一三八八）

「問。解釈中心王所住之処必有塵沙心数文。爾者所云心王者唯為指大日一尊将通中胎八葉仏菩薩耶」

（『遮那業案立草』巻第二）[26]

このうち、『杲宝伝宝記』の記述は頼宝口・杲宝記の『即身義東聞記』（以下、『東聞記』）[27]の記述とほぼ一致し、印融の『古筆拾集抄』にも『東聞記』が引用されている。

このように「五仏心王」（新義では「王所分別」）はさまざまな論義書で論じられるが、結論については人師・学派によって差異が見受けられる論題である。そこで、先に挙げた各論義書の結論を私見にて次のようにまとめた。

・五仏心王を主張する論義書

『真言本母集』巻六、『大疏指南鈔』、『宗決』、『杣保隠遁鈔』、『大疏愚案鈔』

・大日心王（四仏心数）を主張する論義書
『除暗鈔』、『大日経疏指心鈔』、『真言本母集』巻一三、『大疏百条第三重』、『大疏談義』、『遮那業案立草』
・その他
『遍明鈔』、『杲宝伝宝記』、『杲宝私抄』、『古筆拾集抄』、『夏中問答』

以上のことから、基本的に宝門・寿門は五仏心王を主張し、新義・台密では大日心王（四仏心数）を主張していることがわかる。一方、東寺学派の頼宝は『真言本母集』の中で、巻六と一三で問・答が入れ替わって両説を記し[28]、また「私に云わく」として次のように表している。

私に云わく、五仏建立王数分別に三義有り。一には五仏皆是れ心数なり。二には大日心王四仏心数なり。三には五仏通じて心王と為す。第一義は制底・幢・光・水精・貝を五仏の三形と為す。是れ中胎大日は修生顕得加持身、四仏は又た因行証入の辺徳なるが故に、同じく心数と為すなり。第二義は五輪塔を中胎三形と為し、幢・光・水精・貝を四仏の三形と為す。仍って中尊は心王、余尊は心数なり。第三義は五輪を五仏の三形と為す。是の故に五尊皆是れ心王なり。此の三義に依るが故に、諸文各一義を作す。更に相違に非ざるなり。若し此の意を得ば、海会の諸尊悉く五大に住せば、曼荼羅皆な是れ心王なり。『大疏』第六阿闍梨所伝の曼荼羅[29]、即ち此の義を表すなり。もし爾らば、上来の難答、只だ是れ一致にして、更に相違に非ざるか。[30]

すなわち五仏の心王心数の分別について三説を挙げるが、これらはそれぞれに一義をなしているものの、特段に相違があるわけではなく、実には大日や五仏のみならず諸尊心王ともなることを説く。

さらに弟子の杲宝も両説の存在を共に認め、『東聞記』に次のように説いている[31]。

今、大日を心王と為し、余尊を心数と為すの一説、及び五仏を心王と為し、余尊を心数と為すの一説と、両義、相違似たり雖も、

法体全一なり。且つ建立の不同に依って、相違有るに似たり。[32]

このように東寺学派は両説を「建立の不同」による、いわば表裏一体のものと捉えていて、いずれか一方の説に固執していない。それに先んじて道範の『遍明鈔』でも、両説を併記した上でさらに九尊即一仏であるから九尊心王を説く[33]が、これは師である覚海（一一四二―一二二三）の説を受けたものともしている。

先ず心王・心数を分別するに、御所釈の中に二義有り。一に云わく、大日即心王・余尊即心数。二に云わく、五仏即心王・余尊即心数文。此の中に初の釈は金界の因果簡別門の義なり。（中略）次の釈は胎界因果不二門の義なり。（中略）是の故に胎蔵四重曼荼羅に付いて心王心数を分別する時は、中院の九尊を以て同じく心王と為す、是れ九識心王[34]なるが故に。第一重以下を心数と為す、是れ眷属なるが故に。然れば則ち当段の心王心数の分別は九尊を以て同じく心王と為し、毘盧遮那と名づくるなり。故に『疏』の二十に云わく、是の故に八葉は皆な是れ大日如来の一体なり。若し如来但だ自証の法に住すれば、則ち人を度すること能わず。何を以ての故に。此の処は微妙寂絶にして心量を出荷せり。何を説いて人に示さんや。故に漸次に流出し、漸く第一院に入る、等と。九尊を以て同じく大日と為す事、分明なり。凡そ八葉を開くと雖も、唯一果の徳なり。遮那の一仏と雖も、九識宛然なり。故に大日即九尊。九尊即一仏なり。裏書きに云わく、八葉九尊を以て、同じく心王毘盧遮那と為す。即ち今の経の教主と為す。花王院覚海の義なり。[35]

すなわち、心王心数の分別には大日心王・余尊心数説（金剛界因果簡別門）と五仏心王・余尊心数説（胎蔵界因果不二門）があるが、胎蔵曼荼羅に関して分別するならば、（中胎八葉院の）九尊即（大日）一仏であるから九尊（九識）心王であり、同時に大日心王であるとも説かれる。そしてこれは『遍明鈔』の裏書によれば、師の覚海の説であるという。

ここで挙げた『遍明鈔』の裏書とは、覚海相伝の義を記したという『除暗鈔』の「八葉九尊、同じく醍醐の果徳なるが故に、心王の位は毘盧遮那に属する」[36]の文によったものと思われるが、『除暗鈔』では、「大日に限って心王と為す」[37]と大日心王説を採っ

ていることには注意が必要である。『除暗鈔』は貞応三（一二二四）年頃に検校宗禅のもとに道範等の学侶が参集して談義したものを後に記したものであるのに対し、『遍明鈔』は讃岐配流中の寛元三（一二四五）年に禅閣の命によって記されたもので、静遍（一一六六―一二二四）相伝の義を中心に、覚海の説も併せて記しているとされる。これより、道範は心王・心数の分別について、覚海の説を引用しつつ結論を静遍相伝の義に寄せたとする可能性も考えられる。

その真偽は一旦おくとしても、各論義書の結論の分類から、道範以前に既に心王と心数の分別については教説が分かれていて[38]、人師や学派がそれぞれにいずれかの説を強調していくことになったことがうかがえる。

三　『宗義決択集』における五仏心王―南山教学における五仏心王―

五仏心王の論義は、それぞれの学派によって結論が異なる傾向を見出すことができるとは言え、その内容自体は論義書によってそれぞれ特色がある。しかしながら、一々の書を全て検討することは紙幅の都合上不可能であるから、本論では『宗決』をあげて検討することにしたい。

『宗決』では、まず問者が大日一尊を心王とし、四仏を心数とする義が有るのか無いのかを問い、もし五仏心王とするならば、心王と心所（＝心数）の相対関係は不定であるのに、どうして四仏が心数に属すると言う義が無いと言えるのか、またそうではなく、四仏が心数に属する（大日心王）とするならば、大師の「五仏は即ち心王、他の諸尊は心数」との解釈に違うのではないかと、否定・肯定の「両方」[39]の立場で疑問を呈すると、答者は五仏心王の義に限ることを述べている。

さらに『宗決』では、次のように問答を重ねている。長文となるが、論義の内容を概観するためにその問答を記す。

難じて云わく、凡そ心王・心数の対弁は、当に義の相望に随って不定なるべし。何ぞ大日に望めて四仏を心数に属するの義、無からんや。是を以て法相等の意は、則ち八識心王の義を立つと雖も、三論には則ち唯し第八識を心王と為し、七転識等を心所と為す。是れ即ち法相に心王と為す七転識を以て、而も心所と為す。又た『釈摩訶衍論』等の意は、本覚流伝の識を心王と

為し、無明流伝の相を心所と為れども、然も法相の如きは智を以て心所と為す。爾らば則ち心王・心数、何ぞ局定の義有らんや。加之、五仏心王・余尊心数なることは、五仏は余尊に勝るる故に、之れを心王と為るか。爾れば則ち四仏は中台大日に望むるときは、則ち劣なるべきが故に、当に心数に属すべきこと、理在絶言なり。若し所答の如く五仏は心王に限ると言わば、五仏に勝劣有るべからざるか。若し五仏に勝劣無しといわば、余尊も亦た勝劣有るべからざるか。若し諸尊に勝劣無しといわば、諸尊も悉く心王と名づくべきか。此れは則ち孰れの心数に対して心王と名づくべきや。以て知んぬ。横平等門には則ち諸尊勝劣無きが故に、王・所を論ずべきに非ず。竪浅深に約するときは則ち大日より四仏を開くが故に、勝劣有るべきこと異論すべからず。若し五仏に勝劣有る義極成せば、則ち争でか大日に望めて四仏を心数に属するの義、之れ無しと云うべしや。茲に因って証文を勘うるに、『菩提心論』に云わく、「是に於いて印成する法界体性の中より四仏を流出す」文[40]と。『疏』第一本に云わく、「如来、此の宮の中に在すとき、独り処すとや為ん。眷属有りや。故に云う。此の中に乃ち無辺の眷属有って、常に集会する所なり。所謂、執金剛等なり」[41]と。また第二十云わく、「此れは是れ毘盧遮那仏本地の身、華台の体なり。八葉を超え方所を絶して、有心の境界に非ず」[42]と。『金剛頂経開題』に云わく、「大日の垂拱に奉ること衆星の北辰に共うが如し」[43]と。大師一処の解釈『秘蔵記』末に云わく、「中台心王の尊を以て一切の心主を摂す。是れを一識と謂う」[44]と。『異本即身義』に云わく、「問う。何物を心数と名づけ、亦た心王と名づくるや。答う。金剛界の七十三尊に於いては毘盧遮那は是れ心王、余の七十二尊は是れ心数なり。胎蔵界会の五百尊に於いては毘盧遮那を心王と名づけ、余の四百九十九尊を心数と名づく」[45]と。又た一本の『即身義』に云わく、「問う。五智に心王・心所を分かつ方、何。答う。法界体性智は是れ心王、余の四智は是れ心所なり。問う。諸宗皆な大円鏡智を以て心王と為す。今何ぞ独り之れを以て心所に摂するや。答う。宗の法門の中に是くの如く説くが故に、大円鏡智を以て心所に摂す」文[46]と。此れ等の文意分明なり。但し「五仏即心王余尊即心数」の文に至っては、本自り五仏心王の一辺なるが故に、誠証を成ぜず。次に義門無窮と雖も、王・所に於いては相望不定の義、之れ有るべからずと言うは爾らず。既に義門無窮なりと許さば、何ぞ心王・心数相望不定の義無しと言うべけんや。爾らば明ならず。如何。

重ねて会して云わく、自宗の意は五仏を以て心王と為し、余尊を心数と為ること、是れ治定の性相なり。五仏、既に心王と為す。何ぞ復た之れを心数に属せんや。譬えば世間の王者を復た眷属と云わざるが如し。所難の如くならば、則ち王・所相濫の失を

招かんか。是れを以て『十住心論』第十に云わく、「此れは総じて大秘密究竟心王如来大毘盧遮那五智四印、及び心数微塵数の眷属を明かす」[47]と。又た云わく、「五仏は即ち心王、余尊は即ち心数なり」と。『性霊集』第七に云わく、「九識の心王は乗蓮の相を凝らし、五智の法帝は坐月の貌を厳しゅうす」[48]と。『金剛頂経開題』に云わく、「王の字は五仏に通ず。五仏は共に五大の王為り」[文49]と。是れ等の釈文、掌を指す者なり。但し義門無窮にして王・所の相望重々なるべしという難に至っては、会通の大旨、以前の如くなるべし。若し来難の如く、義の相望に随って王・所に重々の義有りといわば、三重曼荼羅等に於いて第三重に望みて、第二重を心王と為る義、亦た之れ有るべきか。然らば何ぞ別に四仏に於いて心王・心数の義を論ずること、之れ有らんや。次に五仏に於いて勝劣有るべきが故に、当に大日に望みて四仏を心数に属すべしというの義は、設令浅深有りとも五仏は心王に限るべし。例えば法相宗所立の八識の如きは勝劣有りと雖も、八識心王の義を談ず。第八識に望みて六・七等の識を以て心所と為さざるなり。次に三論は七転識を心数と為すと雖も、法相には之れを心王と為る例難は、固より宗教各別なるが故に、準例すべからず。若し一宗に於いて是くの如きの例之れ有らば、宜しく難勢と為すべきなり。次に『釈論』の例難も亦た応に準じて知るべし。次に出す所の文証は、先ず『異本即身義』は疑有る書なるが故に、依用し難き者なり。次に一処の解釈の文は、心王・心数に於いて三重の釈を作すと雖も、共に五仏・九尊を以て、「五仏・四菩薩、豈に異身ならんや。即ち一毘盧遮那のみ」『疏』第二十の文[50]の道理に約して、四仏・四菩薩を大日に属せらるるなり。次に『金剛頂経開題』の釈、此れ亦た大日に四仏を摂するなり。故に上の釈に「五智の大我は妙相を湛えて、以て霊台に坐す」[51]と云うて、五智を一具に心王大我尊と為る故に、是れ亦た四仏を大日に摂するなり。次に疏家の「如来、此の宮の中に在す」等の釈、是れ亦た大日に四仏を摂す。然る所以は、『十住心論』第十に『大日経』の「一時薄伽梵」等の文を引いて、釈して云わく、「此れは総じて大秘密究竟心王如来大毘盧遮那五智四印、及び心数微塵数の眷属を明かす」[文]と。薄伽梵教主の句に、五仏具に有ること分明なり。次に「八葉を超えて」等の文は、中台八葉を絶すと云うと雖も、而も八葉を心数に属する義、見えざる所なり。次に『菩提心論』の釈、亦た只だ是れ能生・所生の不同を明かすのみ。四仏、心数に属すと謂わざるが故に、証に非ず。爾らば過無し。[52]

すなわち、問者が心王と心数の区別は、まさに教義の相望にしたがって不定であるはずだから、大日に対して四仏を心数とする義があるはずである。これによって法相宗などの意は、八識心王の義をたてるけれども、三論宗では第八識のみを心王として、七転識などを心所としている。これはつまり、法相では心王とされる七転識を心所としているのである。また『釈摩訶衍論』などの説くところは、本覚流伝の識を心王とし、無明流伝の相を心所とするけれども、さらに法相では智をもって心所としている[53]。そうであるならば、心王・心数に限定はないはずである。それだけでなく、五仏心王・余尊心数とすることは、五仏が他の諸尊に勝るから心王であるとするならば、四仏は中台の大日に対する時は下位であるから、心数に属することになることは当然の道理である。もし五仏心王であると言うなら、五仏には優劣が無いということなのか。もし五仏に優劣が無いというならば、他の諸尊にもまた優劣があってはならないのではないか。もし他の諸尊にも優劣が無いというならば、他の諸尊もすべて心王と名づけなければならないのではないか。これはつまり、どの心数に対して心王と名づけるべきなのか、ということである。したがって横平等門的な見方では諸尊に優劣はないから、心王・心所を論ずる必要はない。竪の浅深（差別門）的な見方では、大日より四仏が展開されるのであるから、優劣があることに異論をはさむ余地はない。もし五仏に優劣が有ることをつきつめるなら、どうして大日に対して四仏を心数に属するという教説が無いと言えるのか、と問い、『菩提心論』・『大日経疏』・『金剛頂経開題』・『秘蔵記』・『異本即身義』を引用して論証している。さらに、「五仏は即ち心王、余尊は即ち心数」の文は誠の証明とはならず、教義の区別が無数であることを認めるならば、心王・心数の相望不定の義が無いとは言えない、と批判する。

これに対して、答者は自宗の意は五仏を心王、他の諸尊を心数とすることは必定であり、心王である五仏をどうして敢えて心数にする必要があるのか。例えるなら国王を臣下とは言わないようなものであり、逆に心王・心所のあるべき姿が乱れる過失を招いてしまうではないか、と答える。そして『十住心論』・『性霊集』・『金剛頂経開題』を引用して反論している。さらに教義の区別が無数あって心王・心所の相望が重々であるという論難について、三重の曼荼羅などにおいて第三重に対して第二重を心王とする義がないように、四仏についても心王・心数を論ずることはない。五仏についても優劣がないはずであるから、大日に対して四仏を心数に属するとの意見は、たとえ浅・深があるとしても、五仏は心王とする必要がある。例えば法相宗の立てた八識には優劣があるとはいえ、八識心王を論じている。第八識に対して六・七識などを心所とするわけではない。次に三論は七転識を心数とするとは

いっても、法相にはこれを心王とする論難の例は、そもそも宗派の教えがそれぞれ別々であるから、それに倣う必要はない。次に『釈論』の論難の例もまたこれに準じて知るべきである、との見解を示し、次に問者によって示された証拠の文（『異本即身義』・『秘蔵記』・『金剛頂経開題』・『大日経疏』・『菩提心論』）について、例えば『異本即身義』については偽撰の疑いがある書物であるから、依用し難いものであることを述べるなど、一々に反論して、五仏心王の義が成立する旨を主張している。

このように『宗決』では、それぞれが論拠とすべき書物を引用して多岐にわたる問答を重ねていることが確認できる。それぞれに注目すべき点は多いが、特に次の二つの点を挙げておきたい。

①『異本即身義』の偽撰問題を論じている。

②法相や三論、『釈論』の教説を参考にしている。

この二点は、『宗決』で何故五仏心王が主張されるのか、という疑問にも関係する問題であるので、一々に『宗決』の記述から検討する。

さてまず注目されるのは、①『異本即身義』の偽撰問題を論じていることである。これについては、先に挙げた問答の後にさらに詳細に問答を重ねている。

難じて云わく、『異本即身義』は疑有る書とは、その由有りや。

答えて云わく、先ず「法界体性智は是れ心王、余の四智は是れ心数」の文は、彼の下に乃ち云わく、「諸宗大円鏡智を以て心王と為す」文と。然るに諸宗の意、必ずしも然るに非ず。法相等の如きは之れを心所と為し、心王と云わず。則ち是れ謬有るが故に、依用すべからず。次に「毘盧遮那は是れ心王、余の七十二尊は是れ心数」の釈は、此れ亦た疑有り。何となれば、彼の本に『大蓮華部無障礙経』を引く。然るに是れ未渡の経なり。何ぞ引いて証拠と為んや。

難じて云わく、『無障礙経』は設令い未渡の経なりとも、若し大師唐土に於いて親しく披覧したまう故に、『即身義』製造の時に当たって、彼を引証したまうならんか。爾らば何の違うことか之れ有らん。次に「諸宗大円鏡智を以て心王と為す」の釈は、聞こゆる所の如く法相等の意は智を心所と為すと雖も、三論等に於いては則ち唯だ第八識のみ心王の義を成ず。故に大円鏡智

を心王と為すの義、妨げ無き者か。

答う。「諸宗大円鏡智を以て心王と為す」というを以て三論と為ば、諸宗の言解し難し。又た智を以て心王と為ること、起信三論等に依ると言わば、唯だ大円鏡智のみを心王と為る義、又た解了し難し。次に『無障礙経』を大師若し唐朝に於いて之れを相承したまわば、則ち当に請来したまうべし。何ぞ未渡の経と云うか。猶お疑有り。[54]

すなわち、論難を言うならば、『異本即身義』は疑いがある書物であると言うが、その理由があるのかとの問いに、まず「法界体性智は心王、他の四智は心数」の文は、それに続いてさらに「諸宗は大円鏡智をもって心王とする」と言うが、諸宗の意は必ずしもそうではない。法相などは智を心所とし、心王とは言わない。つまりこの書には誤りがあるので、依用すべきではない。次に「大日は心王、他の七十二尊は心数」と言う解釈にも疑いがあり、それはその本に『大蓮華部無障礙経』（以下、『無障礙経』）を引用しているからである。『無障礙経』が問題となる理由は、この経典が未請来の経典であるためである、と答えている。

これに対して、問者は『無障礙経』はたとえ未請来の経典であっても、もしかしたら大師が唐の地で見ていたであろうから、『即身義』を撰述するに当たって、それを引用したのではないか。次に「諸宗は大円鏡智をもって心王とする」の解釈は、確かに法相等の意は智を心所とするけれども、三論などについては第八識のみを心王とする（すなわち転識得智すれば大円鏡智となる）義をたてるから差し支えない、と食い下がるが、答者は「諸宗は大円鏡智をもって心王とする」ということをもって三論とするならば、諸宗の意が曖昧となる。また智をもって心王とすることが『起信論』や三論などによると言うならば、ただ大円鏡智のみを心王とする義が理解しがたい。次に大師が『無障礙経』をもし入唐の際に相承していたならば、当然それを請来するはずである、と突っぱねる。

この後、難答ともに「考覈」[55]すべきことを指摘されてこの問答を終わるが、『宗決』では『異本即身義』に偽撰の疑いがあるとして、典拠に用いるべきでないことを指摘している。そして『異本即身義』が偽撰とされた理由の一つが、『無障礙経』を引用することである。『無障礙経』とは、一般には『蓮華三昧経』として知られる偽経である[56]。ただし『無障礙経』や『蓮華三昧経』と言う場合、経典自身と言うよりも、いわゆる「本覚讃」と呼ばれる偈頌を指すことが多く、経典と偈頌の成立を分けて考える必要がある[57]。

いずれにしても『異本即身義』が済暹（一〇二五―一一一五）以降、大師作と信じられたものの、道範や頼瑜なども大師撰を疑っていたことが知られていて[58]、『宗決』でも『異本即身義』の記述に依拠した四仏心数説を否定するのである。

また次に『宗決』の問答で注目される点として、②法相や三論、『釈論』を参考にして、いずれの識が心王となるか、あるいは心所となるかの問答を行っている点が挙げられる。

先に引用した『宗決』のそれぞれの記述を簡潔にまとめると、次のようになる。

・法　相―八識すべてを心王とする。[59]

・三　論―第八識のみを心王とする。[60]

・『釈論』―本覚流伝の識を心王、無明流伝の相を心所とする。[61]

一方、密教では『菩提心論』などの記述[62]により、転識得智によって九識から転換した五智にそれぞれ五仏を配当していて、九識すべてを心王としないと五仏心王は成立し得ない。

・前五識―成所作智―不空成就・天鼓雷音

・意　識―妙観察智―阿弥陀・無量寿

・末那識―平等性智―宝生・開敷華王

・阿頼耶―大円鏡智―阿閦・宝幢

・菴摩羅―法界体性智―大日

つまり、五仏心王の立場では第九識菴摩羅の一識のみならず、前五識～阿頼耶識を含むすべての識を心王と見ていることになる。これに関連して、『宗決』では先に挙げた長文の問答の後に、続けて次のような問答を記している。

難じて云わく、一処の解釈の「中台心王の尊を以て一切心主と摂す。是れを一識と謂う」の文に就いて、「五仏・四菩薩、豈に異身ならんや。即ち一毘盧遮那なり」の道理を以ての故に、中台の心王に四仏・四菩薩を摂すというの会通、未だ審ならず。次下の九識分別の釈に云わく、「八葉及び中台の尊を以て、一切の心主を摂す。是れを九識と謂う」と。此れは九尊を以て能摂

と為し、余尊を所摂と為すなり。答説の如くならば、則ち一識分別・九識分別、其の不同若何。

答えて云わく、応に言うべし。一識分別の釈は、中台に四仏を摂す。是れ即ち金界の五仏心王の義なり。九識分別の釈は、九尊を以て能摂と為す。是れ即ち胎蔵の九識心王の義なり、と。[63]

すなわち、問者が『秘蔵記』の「中台の心王の尊をもって一切の心主を摂めるから、これを一識という」の文について、「五仏・四菩薩がどうして異身であるのか。すなわち大日一尊のみである」との道理を用いるから、中台の心王に四仏・四菩薩を摂めるという会通はいまだ審らかになっていない。一方、（同じく『秘蔵記』の）九識分別の解釈に「八葉、及び中台の尊をもって一切の心主を摂めるから、これを九識という」と言っている。これは九尊をもって能摂として、他の諸尊を所摂としている。答説の通りならば、一識分別・九識分別の同異はどのようなものであるのか、と問うと、答者は一識分別の解釈は中台に四仏を含めるのであり、金剛界の五仏心王の義である。一方、九識分別の解釈は、九尊をもって能摂とするのであり、胎蔵の九識心王の義である、と規定している。

問者が引用した『秘蔵記』の文は、顕教の八識に対して密教では一・八・九・十識[64]に分別することを説くことについて記した問答の部分であり、『宗決』は一識といえども実にはすべての識を会するものであるから、あくまで具象的な五仏と見てそれらはすべてが心王であることを主張し、転識得智の観点からも五仏心王・九識心王であるべき事を論じようとしていると考えられる。

ところで『宗決』では、答者が一識分別には四仏も含まれると解釈して金剛界の五仏心王、九識分別は胎蔵の九識心王であると主張し、金・胎を分けている。このように『宗決』でいう五仏とは、基本的には金剛界の五仏を想定している[65]とも考えられるが、具体的な五仏の名が記されず、両部のいずれか、あるいは両方を指すのかは明確でない。

一方、『遍明鈔』では大師の口説を真済が記したとされる『高雄口決』を引用して、「（若し九識に配さば、）観音眼識・彌勒耳識・文殊鼻識・普賢舌識・阿閦身識・宝生意識・無量寿第七（識）・不空（成就）第八（識）・央台（仏）第九（阿摩羅識）」[66]と記し、胎蔵四菩薩と金剛界五仏を不二としてそれぞれに充てていることが注目される。

これに対して台密の『遮那業案立草』では「心王者唯為指大日一尊将通中胎八葉仏菩薩耶」とあるように、明らかに胎蔵の五仏を想定していて、東密側との差異が感じられる。この『遮那業案立草』を含む台密の教説については、『宗決』が五仏心王の主張を

行う理由も含めて次章にて検討する。

四　台密における心王・心数解釈―五仏心王との比較―

東密の古義派では五仏心王、新義派では王所分別の名称で論じられる心王心数の解釈について、実は台密でも論義の対象となっている。実導仁空が記した『遮那業案立草』の中で、『大日経義釈』（あるいは『大日経疏』）の「心王所住の処には必ず塵沙の心数有り」[67]の文について、「爾らば云う所の心王は唯だ大日一尊を指さんと為か、将た中胎八葉仏菩薩に通ずるか。答う。此の事、輒ち定め難しと雖も、且く一意に存せば大日一尊に限るべし」[68]と、いわば大日心王を主張して、その後『大日経義釈』や『十住心論』、『真言宗教時義』等を引用し問答を行っている。

このように台密では大日心王を主張するわけであるが、これには五大院安然（八四一？―九一五？）をはじめとする台密の教説の影響が考えられる。

特に安然は、最澄・円仁・円珍などの日本天台の諸師の教説を継承しつつ、大師の十住心思想（特に第八・九・十住心の配列）が諸経論の説や疏師の説と合致しないことを述べ、大師を批判したことで知られる。一方で、台密だけでなく東密の教学発展にも大いに影響を及ぼしているが、その思想的特徴は密教を重視し、四一教判と『釈論』の十識説に依用した独自の十識説を説くことなどである。

四一教判とは、仏（説者）・時（時間）・処（場所）・教（内容）の四つが、一に集約しつつ、一切に普遍するということであり、またそれが三世（時間軸）・十方（空間軸）の仏教を包摂すると言うものである。すなわち一仏、一時、一処、一教という四つの視点からの絶対的な「一」を構築し、それがそのまま一切につながる（一即一切）という安然独自の思想である。

また安然独自の十識説とは、『釈論』に説かれる「眼識心・耳識心・鼻識心・舌識心・身識心・意識心・末那識心・阿梨耶識心・多一識心・一一識心」[69]を基に、第九番目の識として一切一心識[70]、第十番目の識として一心一心識を説くものである。

問う。天台宗は法華を以って実教と為す。而も法華の中の阿閦・弥陀は本是れ他仏にして釈迦身に非ず。又た普賢・文殊・観音・弥勒も亦是れ他人にして釈迦身に非ず。今の真言宗は皆な是れ一仏一身なりと云う。若し法華の説が是れ実ならば、真言の説は権なるべし。若し真言の説が是れ実ならば、法華の説は権なるべし。何ぞ同なりと云うや。答う。『法華経』は一切一心識に約す。故に阿閦・弥陀は是れ他仏身なりと云い、又た普賢等は是れ釈迦身に非ず。今の真言宗は一心一心識に約す。故に四方の四仏四維の四菩薩は皆な大日身なりと云う。[71]

すなわち法華（天台教学）を一切一心識、真言（密教）を一心一心識に当てているのであるが、一切一心識とは真如が随縁することによって現象世界に多様に展開している視点から見れば、現象世界は多体・差別・一切衆生各識各心であるから、根源たる一の展開が一切（一切一心識）であるとする立場であり、一心一心識とは現象世界も真如が展開したものであるから、それは別々ではなくそのまま一の存在であるとする視点から見れば、一体・平等・一切衆生一識一心であり、根源と展開は一なるものであるというのである。[72]

これを五仏心王の論義に当てはめてみれば、安然の立場は「一仏一身」であって曼荼羅の「四方の四仏四維の四菩薩は皆な大日身」であるから、東密古義の五仏心王とは逆に一仏に集約していく大日心王の立場に近いと見ても良いであろう。

とするならば、『宗決』などでことさらに五仏心王を主張する理由として、台密の存在を想定する必要があるかもしれない。これについては、他の論義も含めて総合的な研究を要するが、少なくとも五仏心王の論義については、直接的な台密などへの言及はないものの、いわば而二不二のそれぞれの立場から心王・心数説が唱えられ、古義は大日心王を説く新義や台密への対抗[73]、それらとの差別化を図るために、五仏心王を主張したことも考えられる。

というのも、『宗決』をはじめ東密の論義書では、天台や華厳の教学との同異を論ずる論題も多く見られるからである。例えば「一乗経劫」[74]は、『即身義』に「諸経論の中に皆な三劫成仏を説く。今、即身成仏の義を建立する」[75]とあるように、顕教は三劫成仏、密教は即身成仏と規定されるが、第八・九住心とされた法華一乗や華厳一乗では大師以前から一生成仏や一念成仏が説かれていることから、両一乗教は三劫を経て成仏するか否かを論じている。

このように『宗決』をはじめ論義書では、他宗派の教説や東密内における流派の差異について論じられていて、これらの思想的背景も視野に入れて検討する必要が生じてくるのである。

まとめ

「五仏心王」は、大日を中尊とした五仏について、五仏が共に心王であるのか、それとも大日のみを心王と認め、他の四仏を心数とするのかを論じる算題である。そこで問題となるのは四仏が心王であるか心数であるのか、いずれの識（あるいは智）を心王とし、心王と心数をどのように捉えるべきか、ということである。

そのため本論では特に『宗決』について検討した結果、以下の特徴が明らかとなった。

Ⅰ「五仏は即ち心王、余尊は即ち心数」の記述を根拠として五仏心王を主張。

Ⅱ唯識や三論などの教説も参考にしている。

Ⅲ引証される『異本即身義』の偽撰問題を取り上げている。

概して南山教学は宝門・寿門を問わず五仏心王を主張し、新義・台密は四仏心数（大日心王）を主張している。特にこれまであまり注目されてこなかった台密の論義書では、安然の思想を受け継いだ教説を立てていて、安然の影響をうかがい知ることができる。一方、『遍明鈔』や東寺学派は両説を共に認め、両者をいわば表裏一体と見ている。

これらの検討の結果、東密では道範以前から複数の説を立てられ、それぞれの教学にしたがって、心王・心数の分別を決択していったことがうかがえる。その意味では、五仏心王（王所分別）にはそれぞれの立場が明示されているともいえ、その意図を透かし見ることが可能であるかもしれない。例えば南山教学が五仏心王を主張する背景には、台密や他流派への対抗という面も十分に考えられるが、「五仏心王」は「四仏会座」や「一門普門」、あるいは「心王第八」などの論義とも関係が深く、これらの論義を踏まえ

た上で論ずる必要があり、これらの論義についての考察は別稿に譲る。

いずれにしても、論義には各諸問題を題材とした問答の中に、真言密教の教説を透かし見ることができる。これは諸問題の解決を図る中で、同時に真言密教の教えが何たるかを表明しているとも言え、多方面からの総合的な研究が必要となることは言うまでもない。

1　論義に関する先行研究としては、栂尾祥雲『日本密教学道史』（高野山大学出版部、一九四二年）等がある。また法相・天台・真言（古義・新義）における論義の形態等に関しては、智山勧学会編『論義の研究』（青史出版、二〇〇〇年）を参照されたい。

2　各個別の論題を検討した先行研究として、権田雷斧「密教綱要」（『権田雷斧名著選集』一、東洋文化出版、一九八五年、初出は一九一六年）・「密教奥義」（『権田雷斧名著選集』三、一九八五年、初出は一九二〇年）や林田光禅『真言宗綱要』（『真言宗選書』三、同胞舎出版、一九八六年、初出は一九一七年）、中村本然『真言教学の諸問題』（高野山大学通信教育室、二〇〇五年）、小林靖典「中性院頼瑜における自性会と加持世界―「自性会因人」「実行当機」の算題をめぐって―」（『智山学報』五六、二〇〇七年）、林山まゆり「中世高野山教学における煩悩論―宥快の根本無明解釈を中心に―」（『東洋の思想と宗教』二五、二〇〇八年）・「中世真言教学における識大の解釈」（『印仏研』六四―一、二〇一五年）、北川真寛「東密における三密行について―論義とその背景としての浄土思想を含めて」（『日本仏教綜合研究』七、二〇〇九年）・「東密における六度行について―論義書を中心に―」（『高野山大学密教文化研究所紀要』二七、二〇一四年）・「綵画形像について―論義書を中心に―」（『密教文化』二三六、二〇一六年）、千葉正「頼宝撰『真言本母集』に見られる禅籍について」（『印仏研』六三―二、二〇一五年）、佐藤もな「真福寺大須文庫所蔵『林葉鈔』の検討」（『印仏研』六三―二、二〇一五年）・「『覚阿問答鈔』における道範」（『天台・真言 諸宗論攷』、山喜房、二〇一五年）、土居夏樹「「六大四曼互為能生」について」（『密教学研究』四八、二〇一六年）、また「初地即極」や「宿善有無」につながる教説について論じた大鹿眞央「東密における初地即極説の展開」（『東洋の思想と宗教』二九、二〇一二年）・「中世東密教学における宿善解釈の展開―道範の宿善解釈を中心に―」（『智山学報』六三、二〇一四年）等がある。

3　『弘全』一、五〇七頁。『定弘全』三、一九頁。同様の文として、『吽字義』にも「心王心数主伴無尽なり」（『弘全』一、五四五頁。『定弘全』三、六四頁）とある。

4　『弘全』一、五〇九頁。『定弘全』三、二〇頁。

5　『弘全』一、五一一頁。『定弘全』三、二三頁。

6　『弘全』一、五一八頁。『定弘全』三、三〇頁。

7　『弘全』一、四〇〇頁。『定弘全』二、三一〇頁。その他、『十住心論』巻七に「心王は猶し池水の性の本より清浄なるが如し。心数の浄除は猶し客塵の清浄なるが如し。」（『弘全』一、三三九頁・『定弘全』二、二四二頁。同文は『秘蔵宝鑰』下にも見られる）と記されるなど、心王・

心数の語が散見される。

8 『弘全』一、七〇六頁。『定弘全』四、八六頁。また大師の開題類には心王の語が散見され、例えば『大日経開題』（衆生狂迷）に「秘密曼荼金剛心殿の如きに至っては、是れ則ち最極究竟の心王如来大毘盧遮那自性法身の住処なり。心王の大日は三身を孕んで円円の又の円、心数の曼荼は十地を超えて以って本有の又の本なり。」（『弘全』一、六四四頁・『定弘全』四、一五頁。「秘密曼荼～住処なり」の一文は、『十住心論』一にも記される）と記し、大日心王・諸尊心数とも受け取れるが、『大日経開題』（衆生狂迷）の「心王の国界を浄め、心数の眷属を安ぜん」（『弘全』一、六四七頁・『定弘全』四、一九頁）や『教王経開題』の「心王の天子罪を弔うに力無く、心数の相将は殺伐するに由無し」（『弘全』一、七一六頁・『定弘全』四、九九頁。『理趣経開題』・『法華経開題』・『梵網経開題』にも同文がある。）などでは、心王と心数が対で用いられているものの、それぞれが具体的に何を指すのかは説かれていない。

9 『弘全』二、四二頁。『定弘全』五、一五四頁。

10 『弘全』二、四二頁。『定弘全』五、一五五頁。

11 『弘全』二、四三頁。『定弘全』五、一五六頁。

12 『続真全』五、６０頁上～６１頁上。

13 『続真全』五、１４４頁下～１４６頁上。

14 『大正』五九、五九八頁下～五九九頁上。

15 『続真全』二一、１５３頁下～１５６頁上。

16 『続真全』二一、３２４頁上～３２７頁上。

17 高野山大学蔵、宝城院寄託本（四四三・テ宝・二）、一五～一八丁。

18 『真全』二〇、一七六頁上～一七七頁上。本論題は、識と智のどちらを心王とし心数となすかを論ずるものであり、直接に五仏心王を論ずるものでないが、参考のために挙げておく。

19 『大正』七九、六二五頁上～六二七頁上。

20 高野山大学蔵、増福院寄託本（〇一八・〇一三・〇九）、一三～一四丁。

21 享保四（一七一九）年刊本、高野山大学蔵、光台院寄託本（一―三四・タ光・九八）。

22 『真全』二〇、二六八頁上～二七〇頁下。

23 『真全』一八、三八三頁下～三八四頁下。

24 寛文七（一六六七）年刊本。本論題は、大日を心王と見た時に、大日と諸尊に優劣があるか否かを論ずるものであり、五仏心王というより、一門普門の論題と関係するかとも思われるが、参考のために挙げておく。

25 『大正』七九、七八〇頁下～七八一項上。

26 『大正』七七、二〇五頁下～二〇七頁中。

27 『続真全』一七、２２９頁上～２３０頁下。

28 『密教大辞典』や『国訳一切経』の解説には、『真言本母集』は大日一尊心王の義を成立すると解説しているが、そう単純ではない。ただし弟子の杲宝等が記した『大日経疏演奥鈔』には、「師の曰く、心所有法は是れ四仏心数、淨法界の心王は即ち大日心王なり」（『大正』五九、三〇一頁上）とも言う。

29 栂尾祥雲『曼荼羅の研究』、挿画四七（高野山大学出版部、一九二七年）を参照。

30 『続真全』二一、１５５頁下～１５６頁上。

31 寿門の印融の筆である『古筆拾集抄』も全文がほぼ杲宝の『即身義東聞記』の引用であるから、杲宝説を記していると言える。ただし先徳の記述を収集したのみで印融自身の主張は記されていないとも言え、慎重に判断する必要がある。

32 『続真全』一七、２２９頁下。

33 『大疏百条第三重』には、同書の問答の答（特に九尊心王についてか）について、裏書きに「表答道範之義勢也」と記している。

34 九識心王の語は、大師『性霊集』七「四恩の奉為に二部の大曼荼羅を造する願文」に「九識の心王は乗運の相を凝らし五智の法帝は坐月の貌を厳しゅうす」（『弘全』三、四七七頁。『定弘全』八、一〇九頁）に見られるが、具体的な説明はない。一方、安然の『真言宗教時義』（『大正』七五、三八二頁中）には、九識の心王が法性身と成る時、一切の心所等の法が果界に入って法門となり、眷属も法身となることを説き、これは済暹『大日経住心品疏私記』（『大正』五八、六八五頁下など）にも引用されている。

35 『続真全』五、１４４頁下～１４５頁上。

36 『続真全』五、６１頁上。

37 『続真全』五、６０頁上。

38 五仏心王の語自体は、覚鑁『五輪九字明秘密釈』に「金剛界不二摩訶衍の五仏心王、是れ胎蔵に即して即ち是れ金剛界不二の五仏・五智なり」（『大正』七九、一四頁上）と登場する。

39 頼瑜『即身義愚草』にも見られる、両方論義の体裁をとるものと思われる。論義には古来両方論義・定判論義、通局論義の別があるとされる（榊義孝「『即身義愚草』にみられる論義の構造」、『豊山教学大会紀要』一四、一九八六年）。

40 『大正』三二、五七四頁上。

41 『大正』三九、五八〇頁中。

42 『大正』三九、七八八頁中。

43 『弘全』一、六九〇頁。『定弘全』四、六八頁。

44 『弘全』二、四二頁。『定弘全』五、一五五頁。

45 『真言宗即身成仏義』（『弘全』四、二六頁。『定弘全』三、二〇二～二〇三頁。）
『即身成仏義 異本』（『弘全』四、四七頁。『定弘全』三、二二一頁。）
いずれの異本が引用されているのか、綿密な写本調査が必要であるが、『真言宗即身成仏義』の一部が本個所に引用されていないので、本論に引用されているのは『即身成仏義 異本』かとも思われる。
46 『真言宗即身成仏義 本書問答』（『弘全』四、七頁。『定弘全』三、一八四頁。）
47 『弘全』一、四〇〇～四〇一頁。『定弘全』二、三一一頁。
48 『弘全』三、四七七頁。『定弘全』八、一〇九頁。
49 註8に同じ。
50 『大正』三九、七八七頁下。
51 『弘全』一、六九〇頁。『定弘全』四、六七頁。
52 『真全』一九、五〇頁上～五二頁上。
53 この法相説とは反対に、『果宝私抄』では「今、自宗の意は智を以て心王と為し、識を以て心数と為す」（『真全』二〇、一七六頁上）、と述べている。
54 『真全』一九、五三頁上～下。
55 『真全』一九、五三頁下。
56 「異本即身義　解説」（『定弘全』三、三七七頁。）
57 『蓮華三昧経』の成立については、水上文義「蓮華三昧経の成立をめぐって」（『印仏研』二八―一、一九七九年）・『台密思想形成の研究』第四章（春秋社、二〇〇八年）等の研究がある。
58 「異本即身義　解説」（『定弘全』三、三七七頁～三八二頁。）
59 法相唯識では、心作用である心所に対して、八識を心法（心王）とする〔瀧川郁久「法相宗」（大久保良峻編著『新・八宗綱要』、四四頁、法蔵館、二〇〇一年）など〕。
60 三論宗において、心王が八識全てに通じるのか、第八識のみに限るのかについては、『宗決』巻第一七の「心王第八」で論じられている。「心王第八」についての論考は別稿に譲るが、『十住心論』七などに引用される『大日経疏』の心王の記述について、嘉祥大師吉蔵（五四九―六二三）の著作や『大乗起信論』を引用して論じていて、五仏心王における心王解釈も「心王第八」の論義をふまえたものと考えられる。
61 『釈論』に合致する語句はなく、巻第三・四の取意か。また『宗決』の問答では、『梵網経開題』の「清浄本覚は心王と名づく」（『弘全』一、八一二頁。『定弘全』四、二二二頁。）を引用し、「是れ等は本覚の体を以て心王と為し、縁起の諸識を心数と為す」、とも述べている。一方、政祝『秘蔵宝鑰私記』には、「三論の意は、心王は本覚なり。心数は無明なり。」との見解もみられる（『真全』一一、三六三頁）。
62 『菩提心論』（『大正』三二、五七三頁下。）

63 『真全』一九、五二頁上～下。
64 一識―大日、八識―胎蔵八葉の四仏・四菩薩、九識―大日と四仏・四菩薩、十識―『釈論』所説の十識説（『大正』三二、六一一頁下）。
65 『大疏指南鈔』には、問者が「両部倶に大日一尊を以て心王と為す」とある。
66 『遍明鈔』（『続真全』五、１４４頁下～１４５頁上）、『高雄口決』（『大正』七八、三六頁上）。
67 『大日経義釈』（『続天全』密教一、六頁上）、『大日経疏』（『大正』三九、五八〇頁中）。
68 『大正』七七、二〇五頁下。
69 『大正』三二　六〇六頁中。一部省略。
70 一切一心識は『釈論』にも説かれる（『大正』三二、六一一頁上・六一一頁下・六一二頁上）。
71 『真言宗教時義』（『大正』七五、三八九頁下。）
72 安然の教学については、末木文美士『平安初期仏教思想の研究―安然の思想形成を中心として―』（春秋社、一九九五年）などに詳しい。
73 本論では、敢えて新義と台密の同異については踏み込まない。
74 一乗経劫の論義については、北川真寛・土居夏樹「「一乗経劫」について―即身成仏思想に関する問題―」（『高野山大学密教文化研究所紀要』一九、二〇〇六年）で取り扱っている。また新義の論義については、小林靖典「中性院頼瑜における「一乗経劫」について」（『智山学報』、六五、二〇一六年）に詳しい。
75 『弘全』一、五〇六頁。『定弘全』三、一七頁。